

# はかり知れない

群

青

1

悲しみと怒りが振り払われ  
無知と傲慢が  
強く突き飛ばされ  
生存の奥底からのように  
純で澄み切った  
打撃が  
生まれている  
大気が揺れると  
間をおかず  
打ち込まれてくる

2

その小さな心臓では汲み取れないだろうか  
開いたばかりの花のようなきみのその手のひらでは掬えないだろうか  
か  
年老いた男の苦悩

3

目の前にいるのは  
きみのかあさんを愛してしまった男なのだ  
若いおんなの足が一步  
床に伸びて  
薄い靴の底がすすり泣く  
愛してはならない人への思いを断ち切ろうとして  
うなじを流れ落ちるひかりに透いて香りたち  
胸のふくらみを覆う  
嘆きの髪に  
きらめく缺をいれる

愛することが許されない  
愛されることも望めない  
あの男の銀色の頬髭への思いは  
重く  
肩を掴み胸を押しつぶし腰や足の自由を奪い  
嘆く力もなくなつた細い立ち木のような体に  
蔓草となつて絡みつく

4

きみはこのわかいむすめになる

さあ、やってみよう

まず姿勢だ

背骨をまっすぐに伸ばして

よわよわしさはいけない  
同情を誘うような姿勢はいけない

だが

うなじから胸元はうちひしがれている  
首はあやうく持ち上げられているだけだし  
表情はおぼろげで定まらない  
揺れ動くところは隠せない  
思い切ろうとしているのに思い切れない自分に向けられる  
怒り  
嘆き

コルセットを固く締めていても  
思いは夜になるとさらに激しく闇をくぐりさまよう  
入り込む隙間もない城壁を見上げ  
悲鳴を上げる馬に容赦なく鞭をふるい  
思う人の息づかいを求めて  
走らせる

なぜこたえてくれないの

絶叫する

朱色に塗った思いの槍を投げても

水のない堀に音をたてて転がるばかり

狂おしい嘆きを

きみの若いはりつめた体で克明に演じてくれ

登場するきみの最初の姿勢

それがすべてだ

それがすべてを決める

5

五年前だから、倒れる三年前に、きみの父さんがくれた葉書だ。

「親愛なる友の顔を思い出しはするが絵にできない。

きみという役者の印象を絵にするテクニクが足りない。

声を何度も聞いてキイワードを探してみる。

まずは古典的なタッチで線や面にこだわることにする。

きみが吐くせりふは時代やおのれやコミユニティを切り開く呪文の

ようだ。

ぼくらのある時間の空気を濃密によみがえらせる。

きみは、祈り、呪う。

それが人を動かす」

その横に思いのまま図太いタッチで描かれた絵がある。濃い緑色が、白や緋色や茶色に浮かび上がろうとするものを包みコントロールし、

それを黒い線が、緑色を助けて力あるものになっている。

これが彼だ。彼の思いの深さだ。

この絵を見て。

6

きみはいう。

「わたしはこの絵を知りません。

はじめて父とあったのは、つい二年前です。

声の出なくなつた父が目大きく開けて、わたしを見つめていた。

頭の痛みに耐えながら父は、長い時間わたしを見つめた。目が何度

も揺れてはすぐに、怖いように定まって、わたしの中に入ろうとで

もするかのようにだった」

喉を手術して声の出なくなつた彼を、きみの父親だと、ぼくは教え

たのだった。

7

彼は、ぼくにたくさん葉書をくれた。

何をやってもだめなとき、彼は彼の中にいるぼくを見せてくれた。そのたびに、ぼくの力がよみがえった。

ぼくの愛は果てしなく求め、果てしなく受け入れようとする。いつも行き詰まる。

彼はいう。  
愛は曖昧がいい。

8

それまでの年月を取り戻すかのように、きみは彼の世話をし続けた。酸素マスクをし、時の無い世界をさまようばかりのきみの父親は、ほどなく死んでいった。

9

さあ、休憩は終わりだ。  
この愛を演じてみよう。

台本ではこうだ。

むすめは母を奪われた。  
だれひとり身よりもなく、ひとり取り残された。  
そのむすめがはじめて男を思った。  
その男というのは、なんと母をかどわかした男だった。  
野や森をさ迷い、いのちをつないでいたむすめは、たどりついたあの村で、はじめて男を見た。  
雨上がりのぬかるみを、一步一步進む男を見たのだ。  
男は赤いマントを着けた婦人を両腕にかかえていた。  
婦人はすっかり男に身をあずけていた。  
痩せて小柄な男は、馬車のシートに婦人を座らせると、泥まみれのブーツのまま、馬車のステップに立った。  
何事もなかったかのように、馬車はゆっくり走り出した。

またあるとき、ひとり踊る男を見た。大きな木の陰のベンチで休んでいる赤いマントの婦人の前だった。  
細い足をしならせ軽々と夏草の上を飛び、うなるように歌っていた。  
その男が母を略奪していった、傲慢で孤独な元領主なのだった。顔は見えなかったが、赤いマントの婦人は確かに母親だったに違いない。

むすめの身のうちから熱いものが噴き出し、母への思いがそれと混じり合い煮えたぎった。  
無理無体を通す支配者に動くところを、なんと呼べばいいのか。愛と呼べる代物なのか。

「この地を捨ててどこへでも逃れられるものを。」  
でも、このふたつの足は動こうともしない。

思いはあの城へと向かうばかり。

いったいなに、何がわたしをあそこに引き寄せるのか。

何が狂わせるのか」

むすめはうめく。

さあ、ここをやってみよう。

1 0

今にも雨が降りそうな空を見上げたあのひとの目が、炎になって波立った。車に乗ろうとしたとき、あのひとのふくらはぎの緊張が、激しくぼくを打った。

何も言わず、目をあわせもせず、ぼくはとり残されていた。

あのひとの音もない吐息と

ためいきのような髪の毛のゆらぎ。

あるとき、ふわりと開かれた花びらのような微笑を見た。

一瞬あのひとのところが姿を現して、ぼくに微笑んだ。

すぐに、あとかたもなく消えていった唇のいろ。

ちいさな部屋で体を折り曲げて泣いた。

どうせなら姿を見せないでくれ、近づかないでくれ。

1 1

あのひとはきみの母親なのだ。

あのひとはぼくの友人の恋人なのだ。

そして、ぼくの友人の子供を宿して姿を消したひと。

吹雪はじめた石畳の上にあのひとは倒れていた  
 ぼくの乗った車は急には止まらなかった  
 うつぶせの体に見るみる雪が積もった  
 黒いオーパーの下からしみ出すものがあつた  
 あの一とは血を流していた  
 白い顎が引き攣っていた  
 動かないで、じっとしてて、いま、お医者さんが来るから  
 ぼくは知り合いの医者を呼んだ  
 流産だ  
 駆けつけた医者は脈に触れて、もうすぐだから、もうすぐ病院にい  
 けるから、と叫び続けた

その日の夜更け  
 元気な泣き声をあげてきみはこの世の空気を吸つた  
 気を失いかけていたあのひとの目に笑みが宿つた  
 ぼくにはすぐ分かつた  
 あのひとだ

彼のこどもを宿して姿を消したあのひとだ  
 ぼくは彼には言わなかつた  
 洗濯物をゆつくりと運ぶおだやかな足取り  
 空を見あげて口ずさむ歌  
 いっしんに文字を書いているうしろ姿  
 気持ちのいい髪の毛の匂い

「彼の邪魔になりたくない  
 彼の仕事はわたしにはわからない  
 彼が好きだから離れて彼の子供を産む  
 彼の子供といっしょに生きるの  
 彼の知らないところで」

あるときついに口に出してしまった。  
 あのひとは何も聞かなかつたそぶりで、部屋からでていった。  
 「もういい！では、ぼくの狂おしい胸のうちを洗いざらい見せてや

る。ぼくは恋をしている。ぼくはあなたに恋をしている。でもぼくは、この恋が罪の無いものとは思っていない。道ならぬ狂おしいこの恋、あなたはぼくを無視する。ぼくは自分で自分がおろかだと責める」(ジャン・ラシーヌ作 フェードル 内藤濯訳 岩波文庫より)

14

あのひとはいなくなり、間を置かずに、彼は死んでいった。遺されたあのひとのむすめとぼくは、いま、二人の芝居をつくろうとしている。これまでのすべて、彼と手をたずさえてきたこと、そして、あのひととあったことと、ぼくが頑固に役者を通してきたこと、あらいざらいすべてが、大音響をたてている。やがて、すぐに舞台の幕が上がる。

あのひとに会うことはもうないだろう、だから、さあ、新しい幕をあけよう。

15

いい、いいうなずき方だよ。

きみの母さんそっくり。

胸をはろう、顎を、少し上げて、いまからあの男の館に乗り込むんだ。

そう、もつときみは緊迫する。

むすめは、コルセットを僅かに緩める

片方で、男を刺し貫く運命にある、剣を見つめる

先にあるものは

刃なのか

褥なのか

無慈悲な男の青い鉄の胸にむすめは挑む

いつきに

高慢な顎をうち砕く

男はむすめの足元に倒れる

むすめが肩を蹴りあげる

首に刃を突きつける  
男の口から漏れ出すうめきと涎  
母を痛め縛り支配し  
それを愛といいなしてきた男が  
驚きの目で見上げている  
むすめは  
これまでにないかなしみと苦悩と  
それをすべて包み込んで揺れ燃え上がる哀訴に似た表情をして、  
略奪者の胸板を刺しつらぬく  
むすめは攻撃のきわみに立ち  
ゆつくりと痙攣し始める  
愛に貫かれるよりも激しく  
愛そのものを砕くかのように  
震え続ける

16

息を吹き返した男を抱きかかえるむすめが  
甲冑を剥ぐ

鎖帷子を取る  
裸になった男の首を起こして  
わが子のようにむすめは抱く  
むすめも身にはなにも着けていない  
あがつたばかりの太陽のひかりが二人を包む  
むすめは男のなかから聞こえてくる  
母親の声を聞く

母親が男を脱ぎ捨てる  
雨のように新しい朝のひかりが降り注ぐ  
地上は芽生えるものの気配に満たされる  
卵の殻から這い出した生き物たちが笑いあう  
むすめたちは明るい空に溶け出していく  
微笑んでいるむすめ  
おとこはくつろぎ  
母親はうなずき  
光の海にでる  
無数に



花びらのように  
生まれたばかりの子供たちが空を満たす

17

どこに行こうというのだろうか、あのひとは。

そばにいて彼だけを見つめ

顔や肩を撫でていた

遠いあのころ。

夕明りがつき始めた町の  
だれも待つものもない道を歩いているのだろうか。

叫んだらすぐにでも

あのひとは

むすめのいるここに戻ってくるだろうか。

ぼくのところではないだろう。

笑いあっている、彼と一緒にいるのがわかる。

あのひとは聴いていたのだ、

遠くにいなながら

途絶えようとすむ彼の息の音も

流れ落ちるむすめの涙の音も。

あのひとがどこにいてとしても

その目が穏やかで

どんなにか静かなのを

ぼくは思うことができる

了